

2012 年史学研究会例会要旨

楠義彦「16・7 世紀イギリスの地震と地震観」

イギリスは一般に地震の危険性が低い地域として考えられている。しかし、16・17 世紀イギリスにおいて少なくとも 31 回の地震が記録されており、必ずしも地震と無縁なわけではなかった。とりわけ 1580 年 4 月 6 日に発生した地震は死者が出た大地震であった。

そもそもヨーロッパの地震への関心は 1755 年に発生したリスボン地震によって高められたと言われる。この地震で、ヨーロッパからアフリカ北部に津波が押し寄せ、数万人の死者が出た。このリスボン地震を契機として地震予知と被害予測の研究が開始されることになった。

1970 年代より、原子力発電所などの高リスク施設建設と防災のため歴史地震の再検討が行われるようになった。1580 年の地震は、多くの史料の検討から MSK（国際基準）で最大震度 9、マグニチュード 6.2-6.9、英仏海峡の中心（北緯 51 度、東経 1.5 度、震源の深さ 33km）で発生したものと推定された。しかし、この地震が、前近代で例外的に豊富な史料をもつ地震であるにもかかわらず、時代状況のなかでどのように位置づけるべきかについては必ずしも明らかではない。この地震を手がかりに地震史研究の課題について考えてみたい。

小田隆史「「グローバル化」時代におきた東日本大震災～「時間・空間の圧縮」の諸相」

21 世紀以降、交通、輸送、情報通信技術の急速な発達によって我々の時間・空間感覚は大きく変容した。英国の地理学者 D. ハーヴェイ（1999）の言葉をかりれば、「時間・空間の圧縮」の感覚がしごく強烈になった。経済、社会、文化が国境を越えるグローバル化の進展は、それにより収奪される地方をして、**think globally, act locally** という言葉に代表されるように、地域がグローバルな流れとの新たなかわり方を模索せしめた。また、ネットワークを通じた「新しい公共性」構築への流れの一旦も担っている。このような時代に日本の東北地方で大震災と原発事故が発生したことを敢えて意識してこの大災害とその対応を再検証してみたい。例えば、震災直後の津波来襲の様子は、ヘリの映像とともに世界中に生中継されたが、被災者の多くは停電によりその惨状をリアルタイムで見えていない。他方インターネットにアクセス出来た被災者は、電話の輻輳により隣人の安否を確認出来ないなか、SNS を通じて自らの無事を世界中の友人に発信した。また、被災したローカルな福祉組織を応援すべく各地に展開したのは NGO などグローバルに展開する組織等だった。これらは、「時間・空間の圧縮」加速化時代に起きた震災の諸相を見つめる事例の一部にすぎない。ローカルな時代に起きた災害として、そこから我々は何を教訓とすべきか、被災地と所縁のある筆者の体験や実践も交えて考察することを課題としたい。

文献：ハーヴェイ、デヴィッド著・吉原直樹訳（1999）『ポストモダニティの条件』 青木書店

柳澤和明「貞観 11 年陸奥国巨大地震・津波と陸奥国の復興」

貞観 11 年(869) 5 月 26 日、陸奥国を M8.3 ないし 8.4 以上と推定される巨大地震が襲った。貞観地震については、東北古代史・考古学・地震・津波研究者には周知のものであった。しかし、東日本

大震災の前には一般には知られず、震災後に周知されたのは悲劇的で、世間一般に対するアウトリーチ活動が足りなかったことは真剣に反省しなければならない。

昨年起きた世界歴代4位の3.11超巨大地震(Mw9.0)が貞観地震の再来である以上、貞観地震・津波の実態解明が急務である。現在、これまでに報告された発掘調査報告書を丹念に読み解き、貞観地震の前後の様子を究明する試みを続けている。まだ途中段階であるが、これまでにわかってきた貞観地震の実態について、多賀城跡城内と城外の発掘調査成果を中心に紹介する。

多賀城跡城内の地震被害とその復興の様子は、宮城県多賀城跡調査研究所による50年を超えた発掘調査成果で比較的よくわかっている。多賀城跡城外の様子については、津波痕跡がよくわからないのが実情で、今後の調査の進展に期待するところが大きい。

窪田順平「中央ユーラシアにおける環境変動と人間の適応—統合型研究の試み」

ユーラシア大陸の中央部には、モンゴルからアフリカ大陸北部へとつながる広大な乾燥・半乾燥地域が広がっている。ソ連邦時代の農業開発によって、世界第四位の面積を持ったアラル海が一部を残して消滅し、二十世紀最大の環境の悲劇とよばれたことは有名である。しかし、アラル海が中世のモンゴル西征の時期に、現在と同程度まで縮小するなど、気候変動、あるいは環境変動の大きい地域でもある。この地域の歴史は、こうした環境変動に対する人間の適応という側面がある。総合地球環境学研究所のプロジェクト「民族/国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明」(イリプロジェクト)では、自然科学的手法から過去の気候変動や河川の流量、草原などの植生の分布と行った環境の変動の復元を行う一方で、遺跡、史資料、古地図などから環境の変動に対する人間の対応を解読し、この地域における人間と自然の相互作用の歴史的変遷を明らかにすることに取り組んできた。本報告では、「災害」をやや広く捉え、ユーラシア中央部において、気候変動やそれに起因する環境変動に対し人々がどのように適応したかを、東日本大震災のような巨大自然災害や今後予想される気候変動への対応を視野に入れつつ考察する。

梶川伸一「ボリシェヴィキ権力と21/22年飢饉」

ロシアは歴史的にほぼ7年とも10年ともいわれる周期で飢饉に襲われ、その中でも1921/22年飢饉は紛れもなく史上最大規模の被害をもたらした。だが、ソ連時代にはほぼまったく、それ以後も、スターリン時代の32/33年飢饉がロシア史学界で徐々に解明されている状況とは対照的に、今日に至るまで十分な研究がなされたとは言い難い。この歴史的飢饉の規模、実態、救援策、原因について、ロシア・アーカイヴ資料におもに依拠しつつ、この報告では取り上げることにする。

20年の部分的旱魃に引き続き21年はロシアのほぼ全土が未曾有の旱魃に見舞われ、これがこの飢饉の重要な要因であったことは間違いない。だが、それだけではなく、これはボリシェヴィキ権力による人為的大災害であったことを明らかにし、アメリカ救援局ARAを筆頭に、外国組織が援助活動を大規模に展開したロシア史上最後の機会となったが、それらの活動の限界にも触れる。飢饉ではじまった「十月革命」はこの大飢饉へと悲劇的に収斂し、ネップがはじまったとする文脈の中で、この大飢饉を考察する。